札幌大学総合論叢　第 37 号（2014 年 3 月）

〈論文〉

アクティブラーニングを考える（2）
高大連携によるプログラム実践の成果と課題　その 1

増　田　　敦・須　田　心　作

Ⅰ はじめに

中央教育審議会（以下，中教審）答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の提言がきっかけとなって高等学校と大学が連携して教育をおこなう取り組み（以下，高大連携）が本格的に実施されるようになって久しい[15)]。

提言（平成 11 年 12 月）から 15 年ほど経過した現在, 高大連携は全国的に普及している。例えば，高大連携事業の一つである「大学の科目等履修生や公開講座などの制度」の活用状況では，提言当時 15 校であったが平成 18 年度には 991 校となっている。さらに,「大学等における学修の単位認定制度」の活用状況では 22 校から 428 校へと増えている[16)]。このように増加している高大連携は，今後さらに普及していくと予想される。

ところで高大連携とは何であろうか。勝野は，高大連携は狭義と広義の解釈があるとしている[7)]。狭義のそれは「高校生を対象として，大学の教育資源を活用して行う高校の教育活動」である。その特徴は，①高校生が対象であること，②大学の教育資源を活用して行われること，③高校の教育活動として位置づけられる，の三点である。具体的な活動としては，大学の講義の受講やオープンキャンパスに参加し模擬講義などを受講するというようなことが考えられる。

また広義の解釈としては「高校と大学の連携による，高校教育および大学教育の改善充実に資する取り組み」で,「大学生を対象とした基礎学力向上のための補修授業等の実施」,「高校における教科指導等の充実のための研究会の開催」,「高校の教員と大学の教員の指導力向上のための研修会等の開催」などが具体的な活動である[7)]。

また小山らは，高大連携の形態を 4 つに分類している。　①大学教員による高校生への指導，②高校教員による大学生への指導，③高校教員と大学教員の連携，④高校生と大学生の連携　である。そして「①の動きが最も活発であり，②は徐々に増加しつつある。③

と④の動きはほとんどみられないが，高大連携にとっても重要な視点であり，今後の推進が期待される」と述べている[3)]。答申当時の先行研究であり，15年経過した現在ではその取り組みにも進展がみられていると考えられるが，やはり③と④についてはプログラムの開発が必要ではないかと考えられる。

それでは，次に高大連携の目的について考えてみたい。その基本的な考え方について，答申の「第4章　初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方」において以下のように述べられている[15)]。

「高等学校卒業者の7割が何らかの形の高等教育を受けている状況の下で，これまでのようにいかに選抜するかという視点よりもむしろ，学生がいかに自らの能力・意欲・関心に合った高等教育機関を選択するか，あるいは，大学が求める学生を見いだすか，特に，今後はいかに高校教育から高等教育に円滑に移行させていくかという視点から，接続の問題を考えるべき」

このことから，「高校生が大学の学習内容をよく理解し，適切な進路選択ができるようにする」，さらに「大学での学習活動を通して，学ぶことの面白さや興味のある分野を見つけ学習意欲を高める」ことによって「高校教育から高等教育に円滑に移行させる」ことが高大連携の目的と考えられる。

さて，答申をきっかけとして，これまで様々な連携プログラムが実施されてきている。その解釈や目的から考えると，プログラムは狭義の解釈での高大連携が中心におこなわれているのではないかだろうか。このことは文部科学省の推進状況調査や先行研究からも推測できる。またその対象は大学生よりも高校生としているのではないだろうか。高校生が大学での教育システムとその学習内容をよく理解し，入学前に学問の面白さや学ぶ意欲を育むことは，将来的に大学生の能力をさらに高めることができると考えられるので大学にもメリットはある。よって今後も狭義の解釈における高大連携プログラムの充実は重要である。しかし合わせて大学生を対象とした，資質能力を向上させるためのプログラム開発も今後必要になってくるのではないかと考えている。

この大学生の資質と能力の向上プログラムの必要性は，平成20年12月，中教審は第67回総会において「学士課程教育の構築に向けて」という答申からも考えられる。この答申では，大学生が大学での学びを修了する際に授与される「学士」の学位に相応しいレベルの資質能力を備えた人材の養成をおこなうことを大学に求めているのである[17)]。

また平成18年に経済産業省が，社会人として「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」として定義した[18)]。そして大学での学びによってその力が養成されることが期待されていると考えると，やはり大学生の

ための高大連携プログラムの開発が求められている。

これらの力の養成には大学内だけでの学修では限界がある。なぜなら大学での基礎的な理論を学ぶだけでは，その理論を応用し実践する力が育まれないと考えられるからである。実践してみて初めてわかることや新たな発見があるということは経験的に理解していることである。よって理論学習と共にその理論を実践する場を大学生に提供する必要がある。この理論と実践を融合させた学修による学士力や社会人基礎力養成に関連する取り組みは，多くの大学で様々な取り組みがおこなわれてきているが[1）2）12）14)]，高大連携においてもそのプログラム開発が可能ではないかと考えている。

そこで本研究では，高大連携プログラムとして実施している星槎国際高等学校「冬季スクーリング」での大学生（以下，学生）の活動が，学生の社会人基礎力養成におよぼす効果について検証することを目的とした。また合わせて今後の連携におけるプログラム実施の課題を検討する。

Ⅱ 高大連携プログラム実践の経緯

札幌大学は道内各地にあるいくつかの高等学校と高大連携協定を結び活動を展開している。星槎国際高等学校とは2010年度に協定を結び，各種プログラムを連携しておこなっている。ちなみに星槎国際高等学校は，学校法人国際学園が運営する北海道から沖縄まで全国22箇所に学習センターを持つ，広域通信制・単位制通信高等学校である。

1 星槎国際高等学校との高大連携のきっかけと当初の活動

2010年度に協定を結んで正式に高大連携プログラムを実施しているが，星槎国際高等学校（以下，高校）との連携プログラムは2008年度からおこなっている。そのきっかけは，札幌大学出身の高校教員（協同研究者）から冬季スクーリングでのサポート活動の協力要請を筆者（大学教員）が受けたことによる。協力要請を受け，その企画運営（一部）を札幌大学文化学部でレクリエーションプログラム等の企画運営の方法を学んでいる学生（増田ゼミナール）に担当させることにした。

冬季スクーリングは毎年2月に3泊4日で実施される。高校2年生を対象としたスキー実習と夜間の各種学習から構成されるプログラムである。協力要請内容は，スキー実習の補助と夜間の各種学習プログラムの中の一部を企画運営するというものであった。

2 2009年度から2012年度までの冬季スクーリング

2008年度の冬季スクーリングにおける学生の企画運営は，高校生（以下，生徒）に適した効果的なプログラムであったと言えるものではなかったかもしれないが，しかし学生の企画に取り組む姿勢には要請を受ける前と後とで大きな変化が見受けられた。このことは学生が作成した企画書の内容，プログラム運営中の取り組む姿勢やスクーリング終了後の報告書の中から読みとることができた。これらについては後述するが，大学での仲間内の企画運営とは違い，高校という公的な教育機関の生徒たちを対象とするプログラムの企画運営には大きな責任が伴うことを，まず感じたことが大きな要因の一つではないかと推測している。

この経験によって，筆者は大学教員として冬季スクーリングプログラムが学生の教育効果を高める機会となることを強く認識した。そこで次年度以降も同様の活動を担当させてもらえるように高校側に依頼をし，現在では高大連携事業の一つとして活動を実施させてもらっている。

高校側の配慮によって，年々担当させてもらえる活動も多くなり，現在は夜間の活動のほとんどを企画運営させてもらっている。しかし，このことは生徒の教育を担っている高校側にとってはリスクが高いものであり，心配も大きかったのではないかと推測される。そこで，そのリスクを最小限に抑えると共に，学生の教育効果を高めるために高校教員が学生に積極的に関わってくれた。高校側の担当者が学生とのミーティングの機会を何度も設定し，ニーズや目的，方法・内容，また生徒情報に至るまで詳細に話し合い，それらを共有するための流れを作ってくれたことは大学側にとっても学生にとっても大きな支えであった。この高校教員による学生への指導がプログラムの成否を分ける一つの要因になるのではないかと考えている。

3 高大連携プログラムの概要

現在，札幌大学と星槎国際高校との高大連携では，3つのプログラムを展開している。以下，概要を説明する。

1）冬季スクーリング

上述した高大連携協定を結ぶきっかけとなったプログラムである。毎年2月に3泊4日で実施されている。主な活動はスキー実習と夜間の学習やレクリエーション活動である。このプログラムの目的は以下の通りである（生徒配布用資料より抜粋）。

① 集団で生活する中で，主体性を身につける。

② 仲間同士で助け合い，補い合う心を育む。

③ さまざまな体験を通して，自分の得意・苦手や今後の課題をみつけるとともに社会に出るために必要な力について考える。

学生は前年11月より高校教員に指導を受けながら企画に取り組んでいく。平行して生徒との交流の機会を2回実施し，生徒と顔見知りになることでスムーズな運営がおこなえるように体制を整えていく。

なお，スキー実習の基本的な役割は能力別に分けられたスキー班に所属し，その班の生徒をサポートすることである。技術指導はインストラクターがおこなうので体調管理や班のペースから遅れ気味になった生徒のコース誘導などが主な仕事になる。

学生自身もサポート活動をおこなうために，それ相応の技術が必要であり，その技術向上のために，企画の合間に時間を設け自主練習をおこなっていく。

2）教員研修生プログラム

この連携事業は，将来教育職員を目指している学生（教職課程）を対象とした教員養成プログラムである。いわゆる教育実習の長期版である。このプログラムでは高校と大学，それぞれのニーズを目的としている。内容は以下の通りである。

目的（高校のニーズ）

①研修生をTT（ティームティーチング）として配置することによって，集団の中で見過ごされてきた支援の必要な生徒に，より手厚い支援を提供する。

②研修生を配置することによって生まれた時間を個々の生徒対応の時間に使えるようにする。

③研修生を配置することによって，授業展開数を増やし，教育内容の充実を図る。

④研修生を指導することにより，職員の人材育成力を養う。

⑤研修生に星槎の教育を知ってもらうことにより，星槎の教育を広める。

目的（大学のニーズ）

教職課程を履修している学生を対象として，教員に必要な資質と能力の向上を図り，教育現場に則した実践力ある教員養成の機会とする。

大学3年生を対象に募集をおこない，大学内で9時間，高校側で15時間の計24時間の事前講習を受講し，さらに意思確認の面接を経た学生が4年生に進級した4月から12月まで定期的（週1回程度）に高校に通い，高校教員による指導を受けながら，様々な学校業務をおこなうプログラムである。長期（事前講習を含め約1年）に渡る現場での研修は，将来教職を目指す学生にとって，教育現場や教育技術を学ぶことのできる，またとない機会であると考えている。

3）共同研究

このプログラムは特に高校教育に関する研究テーマを定め，そのテーマについて高大の教員が協力して取り組んでいくことを目的とした。

2010年度のテーマは特別支援教育に実績のある星槎国際高等学校と「学習障害生徒の体力・運動能力向上プログラムの開発」であったが，高大教員の時間を合わせ，研究会などを実施することが難しく十分な活動とはいえなかった。また，このプログラムは連携初年度のみの実施となり現在は中断している。今後，日々の業務をおこないながら定期的な研究会などを開催し協同研究を実施するためには，それなりの準備と工夫が必要であると考えさせられた。

このようなことからテーマであるプログラムの開発はできなかったが，生徒がスポーツテストの結果をWEB上で確認し，それを今後の生活に活かすことができるシステムを構築することができたのは高大連携の一つの成果と考えている。

Ⅲ 高大連携プログラムの実践報告　～冬季スクーリング～

本項では，2008 年度から 2012 年度まで実践してきた高大連携プログラムの一つである「冬季スクーリング」について報告をおこなう。

冬季スクーリングのスケジュールは例年表１のような内容で実施される。この表の中の「研修」と表記されている箇所を大学生が担当している。

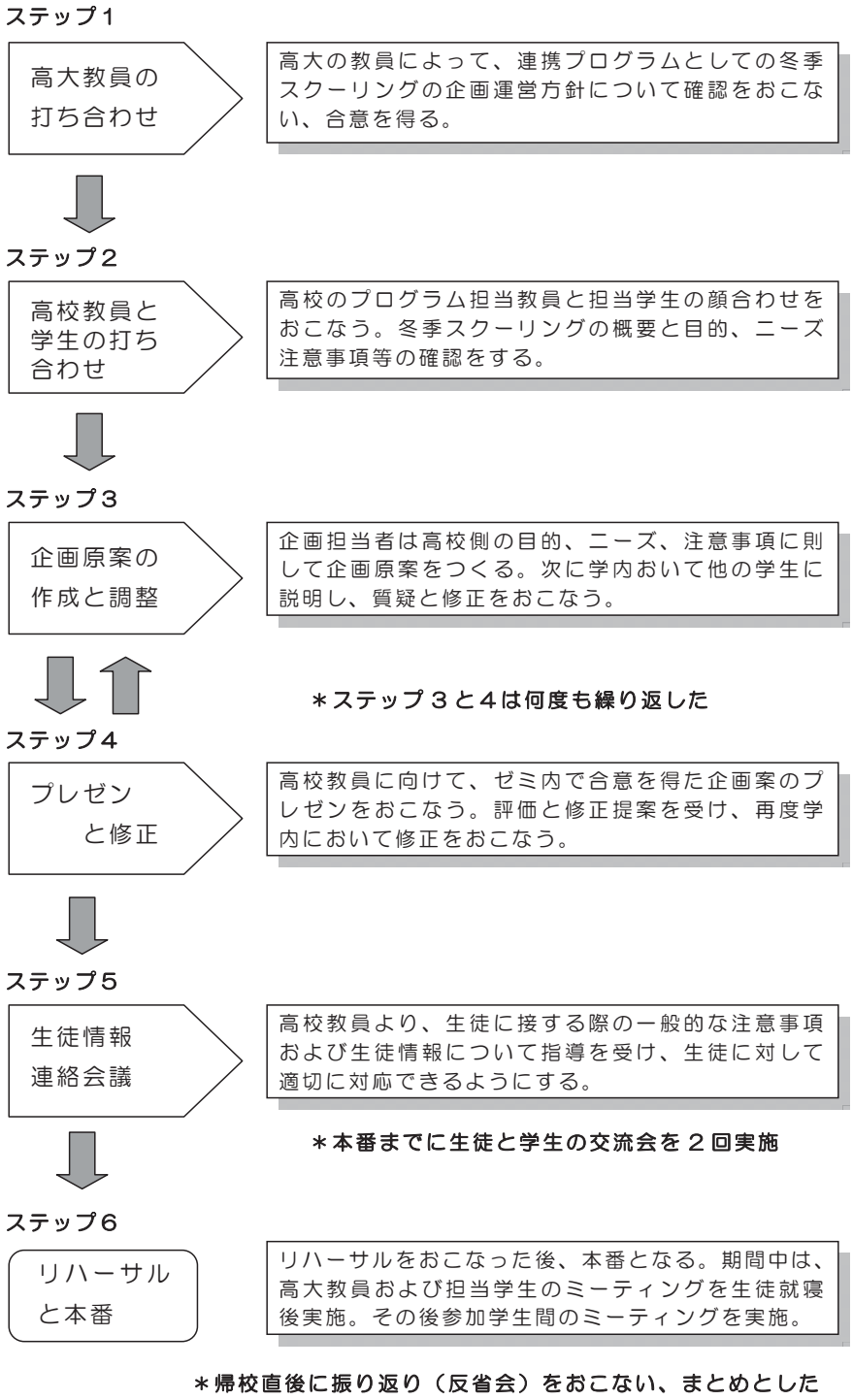
表１　プログラムのスケジュール（参考：2012 年度）

月	日	時間帯	時間	プログラム	場所	備考（実施時間等）
2月	14日（火）	午前	10:00	高校集合・出発	—	—
		午後	14:40	研修（1）　大運動会	体育館	2.0時間
			16:40	自由交流	研修室他	1.0時間
		夜間	18:30	研修（2）　選択プログラム	研修室他	1.5時間
				①レクリエーション		
				②テーブルゲーム＆PA系ゲーム		
			20:00	自由交流（スポーツ）	体育館	1.0時間
	15日（水）	午前	10:00	スキー実習（1）	スキー場	2.0時間
		午後	13:00	スキー実習（2）		2.0時間
		夜間	18:30	研修（3）選択プログラム	体育館他	1.5時間
				①チャレンジ・ザ・ゲーム		
				②ニュースポーツ		
				③ワックスボール作り		
			20:00	自由交流（スポーツ）		1.0時間
	16日（木）	午前	10:00	スキー実習（3）	スキー場	2.0時間
		午後	13:00	スキー実習（4）		2.0時間
		夜間	18:30	研修（4）キャンプファイヤー	ファイヤー場	1.5時間
	16日（木）	午前	10:00	自然の家　出発	—	—
		午後	12:00	高校到着・振り返り	高校	1.0時間

１ 企画運営の流れ

図１はプログラムの企画運営の流れを表している。例年 11 月頃より打ち合わせをおこない企画つくりに入る。特にステップ３と４については作成→修正を繰り返して企画内容の充実を図るようにしている。

図１　プログラム企画運営の流れ



2 これまで実施してきた主な企画内容

企画づくりでは，①目的に応じた企画，②安全に配慮した企画の2点を基本的な条件としておこなった。これまで実施してきた主な内容は表2の通りである。

表2　これまで実施した主な企画内容（2008年度～2012年度）

実施日	時間	目標	対象	企画名称	企画内容	備考
一日目	14:40-15:40（約2時間）	交流	全員	大運動会	障害物競争	＊できるだけ既製の種目を使わず、アレンジあるいは創作したものを使用するようにした
					移動玉入れ、チーム対抗玉入れ、逆転玉入れ	
					5色綱引き、十字綱引き、クイズ綱引き	
					雑巾二人三脚リレー、宅急便リレー、ジャンボバトンリレー	
					大縄跳び	
一・二日目	18:30-20:00（1時間30分）	体験チャレンジ	選択制	イニシアティブゲーム（PA系ゲーム）	仲間探し、スタンドアップ、キャッチ、トラストチェア、人間知恵の輪　等	
				チャレンジ・ザ・ゲーム	ゴム・ダンス・"ステッぴょん"	＊記録をレクリエーション協会の「全国いつでもチャレンジ・ザ・ゲーム」に登録する
					キャッチ・ザ・スティック	
				テーブルゲーム	BIGジェンガ、豚のしっぽ、神経衰弱、ババ抜き、ページワン　等	
				ニュースポーツ	アルティメット、ダブルダッチ、ミニバレー　等	「大学生に挑戦する」という競争の要素を入れておこなう場合もあった
三日目	18:30-20:00（1時間30分）	交流振り返り	全員	キャンプファイヤー＆ゲーム	交流とスクーリングを振り返るプログラム	＊映像や写真を野外スクリーンに映し出し活動を振り返る

＊自由交流の時間では主にスポーツ（フットサル、バスケットボール、バドミントン等）をおこなった。

3 写真でみる運営（実践）の様子

1）大運動会

写真1から写真6が「大運動会」実施中の様子である。初日の活動であるため高校生同士の交流とともに大学生と高校生の交流を深める意味もあるため，「簡単かつ楽しい」種目となるように既製の種目をアレンジしたり，道具を含め新たな種目を創ることをおこなった。

スクーリング最初の企画運営（実践）であるため，中々思うように運営をすることができないことが多かった。しかし逆にここで思うように運営ができないことによって，その後の各種企画プログラムの修正や運営の方法を事前に調整するきっかけになっていた。このことから「うまくいかない」という経験は企画の精度を高めるために必要なことであるとも考えられる。

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

2）イニシアティブゲーム（PA 系ゲーム含む）

写真 7 ～写真 13 が「イニシアティブゲーム」実施中の様子である。ゲームを通して，①友人とコミュニケーションをとれるようにする，②友人と交わることの楽しさを体感する，③自発的にゲームに参加し楽しむ，を目的として企画運営をおこなった。

ちなみに，イニシアティブゲームとは，「小グループ（５～１０人）が，１人では解決できない精神的・身体的課題に対して，一人一人が持っている諸能力を出し合い「知恵」と「勇気」と「協力」のもとにその課題をグループで解決する活動」をいう[19]。

企画では，短時間で達成が可能なゲームの中から選び，参加者全員で課題を達成する喜びや楽しさを体験できるように配慮した。

写真 7

写真 8

写真 9

写真 10

写真 11

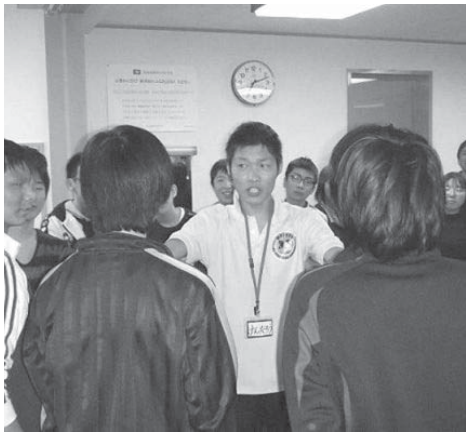


写真 12

写真 13

3）チャレンジ・ザ・ゲーム

写真 14 から写真 16 は「チャレンジ・ザ・ゲーム」実施中の様子である。この活動では，①仲間と協力して記録に挑戦する，②生徒同士，学生と生徒のコミュニケーションを深める，を目的として企画運営をおこなってきた。チャレンジ・ザ・ゲームとは「グループで交流しながら記録に挑戦し，遊び感覚で身体を動かす楽しさを味わえるスポーツ・レクリエーションです。―中略―　さらに，いつでも，どこでも，だれでも，挑戦した記録を申請することで，月間，年間の単位で全国ランキングを競うという『全国いつでもチャレンジ・ザ・ゲーム大会』に参加することができます」というレクリエーションゲームである[20]。2010 年度からスクーリングの企画として取り入れており，全 16 種目のゲームから「キャッチ・ザ・スティック」と「ゴム・ダンス・“ステッぴょん”」の 2 種目を選んで実施している。これは多人数（10 人程度）が一斉に活動をすることができ，かつ少し難しいので挑

戦しがいがあるのではないかということで選んだ。毎年レクリエーション協会に結果を登録している。月間ではあるが登録したグループの中で１～３位の記録を得ることができている（記録はレクリエーション協会のホームページに掲載される）。

写真 14

写真 15

写真 16

4）テーブルゲーム

写真 17 から写真 20 は「テーブルゲーム」実施中の様子である。主にトランプや市販のおもちゃ（ジェンガ）等を使って楽しむレクリエーション活動である。全員が活動を楽しめるように実施方法を工夫した。

学生が企画している活動は主に体を使うものが多いのであるが，このゲームでは頭と体の一部を使って楽しめるものである。昼間のスキー実習等で疲れてしまった生徒には適している活動であると考えている。

写真 17

写真 18

写真 19

写真 20

5）ニュースポーツ

写真 21 と 22 は「ニュースポーツ（アルティメット）」実施中の様子である。アルティメットの他，ダブルダッチ，ミニバレーボールを実施した。学部の専門科目として「ニュースポーツ」の講義と演習を受講している学生が多いので学習したことを実践する機会となっている。

特に運動やスポーツに興味関心の高い生徒に好まれる活動である。学生は活動の運営をするだけではなく，生徒の中に入って共に活動を楽しむので運動・スポーツを通した交流となっており，それを目的の一つともしている。活動終了時間は 20 時であるが続けて活動を希望する生徒も多く，場合によっては種目を変更したり，「学生対生徒」で活動を楽しむこともあった。

写真 21

写真 22

ちなみに，上記２）から５）の活動は選択制なので興味関心がある生徒が集まり，和気藹々と活動を楽しんでいる様子や真剣勝負のような活発な活動がみられた。またこの頃になると学生も生徒と交流できるようになり，少し余裕を持って指導に当たれるような状況になっていると見受けられた。

6）キャンプファイヤー

写真 23 から写真 27 は「キャンプファイヤー」実施中の様子である。毎回キャンプファイヤーを 3 日目の夜に実施している。ゲームやダンスとスクーリング中の写真を見ながら活動を振り返るという内容である。生徒にスクーリングを振り返ってもらい，その一つ一つの活動による成果を確認することと高校時代の楽しい思い出としてもらうことを目的と

した。

写真は高大の教員からも提供を受けるが，各学生が自分のデジタルカメラを持参し担当箇所で撮影したものを主に使用した。生徒全員を漏れなく撮影できるように配慮した。スライドショーは2日目の夜，持参したPCで制作した。かなり時間が掛かる作業であるが，担当者だけではなく全員で写真を選び，生徒が楽しんでもらえるよう工夫しながらスライドショーの制作をおこなった。また生徒全員がスライドショーで流される写真の中に入っているように可能な限りチェックをおこなった。

毎年，制作に必要な技術を有している学生が必ずいる。近年，PCの普及は著しくその基本的な操作技術を有している学生が少なくない。また数年前より情報リテラシーが必修科目となっていることも制作に役立っていると推測される。

スライドショーはキャンプファイヤー実施場所近くにある施設の壁にプロジェクターを用いて映し出し全員で観ることができるようにした。

ちなみに制作したスライドショーはDVDにコピーして後日高校に贈っている。

写真 23

写真 24

写真 25

写真 26

写真 27

7）スキー実習サポート活動

写真 28 から写真 30 は「スキー実習サポート活動」実施中の様子である。技術指導は各班のインストラクターがおこなうので，学生の役割は生徒のサポートである。班に遅れ気味になった生徒と共に行動し安全に班に戻すこと，また体調の不良により実習を継続できなくなった生徒の本部への引率が主な働きである。

ほとんどの学生が北海道の出身者であるのでサポート活動を実施するために必要なスキー技術を有している。しかし中には道外や道東の出身者で一度もスキーを経験したことがない学生もいる。ただ学生全員が各班でのサポート活動をおこなうことを原則としているので，サポート活動ができるようにスキーの「特訓」をおこない技術の習得を目指した。スクーリング 1 カ月前からゼミとして実習を実施するが，特に自信のない学生は自主的に練習をおこなうようにしていた。年度によっては1泊2日の合宿でおこなったこともあった。

写真 28

写真 29

写真 30

4 冬季スクーリングによって学生が学んだことを考える

では，冬季スクーリングに参加した学生はどのような学びをしたのであろうか。学生には冬季スクーリング終了後，企画段階から運営までを振り返り，レポートの作成を求めている。

そこで本項では，このレポートから冬季スクーリングによって学生が学んだことを考察する。方法はレポートの文章の中から，何らかの学びがあったと考えられる文を抜き出しグループ化しそこから考察をおこなった。グループ化した文に共通する名前は筆者がつけた。（　）内の数字は回答した学生の参加年度を表している。なお考察の対象にした学生数は表 3 の通りである

表 3　冬季スクーリング参加学生数（2008 年度～ 2012 年度）

年度	男子	女子	計
2008	7	3	10
2009	6	2	8
2010	8	4	12
2011	5	5	10
2012	5	4	9
計	31	18	49

1）対象の理解の重要性を学ぶ

企画をする際，まず目的や目標を設定することが求められる。この目的や目標を設定する上で「対象の理解」が必要である。よって対象の理解は企画の第一歩といってもよいのではないだろうか。対象の様子やおかれている環境を知ることはとても重要である。つまり「どのような生徒なのか」,「何に興味を持っているのか」,「どのような特徴があるのか」などを把握するのである。

さて，この対象の理解は目的や目標を設定するだけではなく，現状を分析し様々な問題に対処するためにも重要な項目といえるのではないだろうか。以下，学生の文を紹介する。

・スクーリング前に**生徒さんの雰囲気を知る**ことが必要である（2008）
・企画のポイントは**対象者をいかに理解する**かである（2008）
・生徒とできるだけ接する時間を持つことが大切（2009）
・**対象理解がどれ程大切なのか**がわかった。相手を理解しないと何も考えることができない（2011）
・**生徒の状況をスクーリング前に把握する**ことが重要である（2012）

2）目的・目標の共有の重要性を学ぶ

企画の際，目的や目標を設定することはとても重要である。しかし目的や目標を設定することは当たり前のことであり，強いて取り上げる事柄ではないと考えている。大切なのは，目的や目標の設定という当たり前のことをおこなった上で，それをメンバー相互でいかに「共有する」ということではないだろうか。この目的や目標の共有によってメンバーの連携および協力体制が整えられ，場に応じた行動をすることができるようになっていくのではないかと考えている。以下，学生の文を紹介する。

・プログラムについてメンバー全員の**共通理解を深める**ことが大切（2008）
・個人が感じたことや改善点などを，**どんな小さなことでも報告する**こと（2008）
・毎回，自分たちの企画がどうだったのかを**確認し合うことが成長につながる**（2009）
・情**報を共有する**ことにより，プログラムを円滑に進めることができるようになる（2009）
・事前のミーティングはもっと念入りに行い，**細かいことまでもチェックすべき**だと思う（2009）
・**充実したミーティング**が必要だ（2009）
・**ミーティングの大切さ**を学ぶことができた（2009）
・**時間を惜しまずミーティングをおこなった**ところ完璧とは言えないものの，とても充実したプログラムができた（2009）
・**メンバー全員が目的を明確に把握**しておく（2010）
・メンバーの**考えていることを全員で共有した上で目標を設定する**ことが必要である（2010）
・メンバー内での**情報の共有が必要**（2010）
・**みんなが（持っている）情報を提供**して常にどのような状況であるのか，誰が何をしなければならないのかを理解し行動する。（2010）
・（メンバーとの）信頼関係が重要であるが，そのためには**徹底して「報告，連絡，相談」をおこなう**こと（2010）
・一日が終わるたびに反省をし，次にもっとよりよいものができるようにみんなで**話し合い努力した**（2010）

3）情報の共有の重要性を学ぶ

チームで活動をする際に重要になってくる項目の一つが「情報の共有」である。チームメンバーが，それぞれの役割を果たしながら活動を展開している場合，各自が持っている情報は自ずと異なってくる。しかしその情報の差異をそのままにしてしまうと活動を阻害

する要因になってしまうということも考えられる。そこでメンバーそれぞれが入手した情報は可能な限り全員に提供することが求められる。また情報を得ることが，次の対応に変化を生み，よりよい活動の展開に役立つのではないかと考えられる。

そのためにはメンバー全員が情報を共有して活動内容や方法を考え，話し合い，行動することが大切である。また運営中に戸惑った場面，修正が必要になった場合，その対応策を考える上でも情報の共有を基にした構築が重要である。これらのことから情報を共有することを学べたことは大きな成果である。以下，学生の文を紹介する。

・チームワークとはメンバー**全員が同じ目的・目標をもって共有**していること（2010）
・メンバー**全員で目的を共有する**ことが大切だと思う（2011）
・他の機関と企画運営を行う場合は，**目的を共有する**ことが大切だと思う（2011）
・**目的を共有する**こと（2011）
・目指す**目的・目標を共有**しなければならない（2012）

4）コミュニケーションの重要性を学ぶ

コミュニケーションの重要性についてはここで述べる必要もないが，何人かの学生が書いているように「自分から行動を起こす」ことによってコミュニケーションをとることはとても重要だと考えている。それを実感することができたということは大きな学びであった。以下，学生の文を紹介する。

・**コミュニケーションの大切さ**を学ぶことができた（2008）
・**生徒とコミュニケーションをとっていく**うちに生徒と打ち解けられるのが実感できて，とても充実感があった（2008）
・「人と人との関わり」でこんなに仲良くなれたり感動したりできるということを実感した（2010）
・**自分からコミュニケーションをとる**ように心がけて行動する（2010）
・**まず自分から動いてコミュニケーションをとる**ことが大事だと思う（2011）
・コミュニケーションをとることの大切さ（2012）

5）臨機応変な対応の重要性を学ぶ

企画通りに運営をおこなうことは難しい。ましてや学生の立てた企画では尚更である。よって企画通りにいかなかった場合，その後どのように対応できるかが重要になってくる。

そのためには，様々な可能性を予想すること，想定外のことが起こった場合に対応できるように代案を用意しておくことである。そして何よりも対応できるだけの頭の柔軟性が必要になってくるのではないだろうか。5年間の活動で，最初から最後まで企画通りに運営できたという年度はない。だからこそ臨機応変に対応することの重要性を学ぶことができたと考えられる。以下，学生の文を紹介する。

・**臨機応変に対応できた**ことが大きかった（2008）
・「**臨機応変**」**が本当に大切**だと実感した（2008）
・緻密な計画と**臨機応変な実践**（が大切）（2009）
・次に起こることを**予測**しなければいけない（2009）
・想定外のことが起きた場合，**柔軟な対応ができる**ことが重要だと感じた（2011）
・どんな状況になっても**臨機応変に対応ができる**ように準備しておくことが大切（2011）
・いかなる状況にも**対応できる応用力**が必要（2011）
・どんなに綿密に計画を立てても**思った通りには物事は進まない**こともある。その時重要なのはうろたえずに**臨機応変に対応する**ことである（2012）

6）自ら考え行動することの重要性を学ぶ

以下は学生の回答である。「自分で考える」，「自分の意見をしっかり持つ」，「自分で判断する」など当たり前のことではあるが，冬季スクーリングを通して経験から学ぶことができたことが重要である。経験を通して学んだことは生活に活かすことができると考えているからである。

・言われたことだけではなく，**自分で考え行動しなければならない**と思った（2008）
・**自分が何をすべきなのかをもう少し慎重に考える**ことができればもっと良い方向に進んだ（2008）
・人から強制されたものではなく，**自分で判断して取り組むこと**ができるようになった（2010）
・まずは**自分の考えを持つ**こと（2010）
・**自分が何をすべきか把握**しており個人各々がその責任を果たすことである（2010）
・大事なことは，**自分の立ち位置，役割をはっきり理解する**必要がある（2011）
・ただ言われたことをするのではなく，**自分で先のことを考えて行動**することが大

切（2011）

・一人ひとりが**自分の役割をしっかり把握し，努力する**ことが必要（2011）

・目標を達成するために「**必要な事は何か**」**について自分の意見を持ち**，それを発表し合える関係であること（2012）

・企画としての目標と**自分の目標をしっかり持つ**こと（2012）

7）失敗から学ぶ経験をする

どんなに準備をしても予定通りにいかない場合も当然ある。時には失敗してしまうこともある。冬季スクーリングの企画においても同様である。臨機応変に対応して持ち直した活動もあったが，結果的に失敗となってしまった活動も少なからずあった。学生は毎晩ミーティングをおこない，その日の振り返りと次の日の活動の確認をおこなっているが，やはりうまく進行できなかった活動があった日はミーティングが長くなっていた。ミーティングを通して失敗を次の活動にどのように活かすかという視点で話し合い，同じ失敗を繰り返さない取り組みができるようになることが求められる。しっかり準備し万全の体制を作り出すことは当然大切であるが，万一予定通りにいかなかった場合でもそれを乗り越えるための努力をすることがさらに重要であると考えられる。冬季スクーリングでの企画運営がそのような経験と学びになっていることが学生の文から読み取ることができる。以下，学生の文を紹介する。

・**失敗したからこそ学べることもあった**（2008）

・事前準備の大切さはもちろんだが，それ以上に**失敗から学ぶことは多い**（2009）

・失敗をして後悔をするのではなく，どのようにしたらよかったのかという振り返りをし，**次に活かすということ**を学んだ（2009）

・**失敗してから学ぶこと**もたくさんあるが，失敗する前に対応することも大切（2009）

・スクーリングに向けて入念に準備していても，**実際やってみるとうまくいかないことがたくさんある**のだと痛感した（2011）

・**実際やってみて感じること，わかることがたくさん出てきた**（2012）

8）チームワークの重要性を学ぶ

冬季スクーリングの企画運営では，全体のとりまとめをおこなうプロジェクトリーダーを中心に役割分担がおこなわれ全体の活動を展開していく。役割分担は活動によって異な

る。ある活動ではチームリーダーとなったり，別の活動ではサポートに回ったりと様々な役割を企画の中で担っていく。ここで重要なのがチーム力である。活動を通して「チームとは何か」,「チームワークとは何か」を含め，チームで活動することの重要性を経験から学ぶことができていると考えられる。

・「**チーム力**」**が大切**だと思う（2008）
・チームワークに必要なものは３つある。**仲間を「理解する」，仲間を「信じる」，仲間に「与える」**である（2010）
・「**1 歩前に出る**」**ことがチームを高めていく**キッカケにもなるし，信頼も生まれると感じた（2010）
・**チームワークがよければ一人では不可能なことも可能**になる（2010）
・**積極的な発言や行動でチームの活性化ができる**（2010）
・チームワークには**メンバーのことを「知る」ことが必要**だと思う（2010）
・メンバー全員で**目標を達成させようとする強い気持ちが必要**（2010）
・メンバー全員が一つの**目標に向かおうとする気持ちが必要**である（2010）
・（企画運営では）**思ったことを言える発言力や相手の意見を否定しない協調性が必要**である（2011）
・（メンバーの）**話をしっかり聞き，その意見を受け入れ一緒に考えることが大切**である（2011）
・よりよいプログラムを実行するためには「**連携**」**が重要**だと思った（2011）
・プログラムを実行するにあたって，必ずミスが起こる。その**ミスをチームでどう補うか，チーム力が問われる**と思った（2012）

9）その他の学び

その他，学生が学んだ企画運営上で大切な事柄について学生の文を紹介する。これらは当たり前のことであるが，やはり経験を通して学びとったということが重要であると考えている。

・**自分が楽しむこと**と**雰囲気作りの重要性**を感じた（2008）
・**思いは人に影響を与え，心を動かすことができる**のかもしれないということを学んだ（2009）
・勇気をもってチャレンジし，**一歩前に踏み出す。この一歩が成長である**（2009）

・一つの目標を理解し，そこまで辿り着こうという**気持ちの大きさで，最後まで努力することができる**（2010）

・プログラム**開始時間よりも前に集まり，安全確認・準備が必要**（2010）

・全体を見渡す**広い視野が大切**だと思った（2011）

・**事前準備が重要**（2011）

・まず**私たち自身が楽しむことが大切**だと思う（2012）

学生が学び得たことの傾向には年度によって違いが見られる。これは目的・目標の違い，あるいは目的・目標を達成するための方法の違いが考えられる。また学生の資質や基礎的能力の差によるものかもしれない。しかし傾向は違えども，冬季スクーリングに参加し企画運営できたからこそ学び得たものがある。

そう言った意味において，企画運営する機会を与えてもらえたことは大学側として高大連携の大きなメリットであった。

5 冬季スクーリングにおける学生の学びと社会人基礎力

2006 年，経済産業省は「職場や地域者家で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を発表した[8)]。それは 3 つの能力と 12 の能力要素からなっている（図 2 参照）。

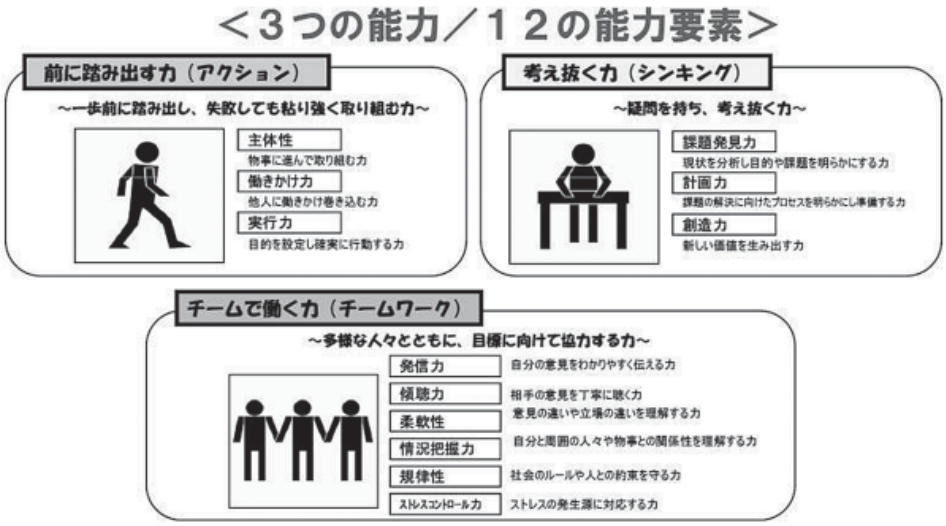


図 2　社会人基礎力の 3 つの能力と 12 の構成要素（経済産業省 HP より転載）

表４は冬季スクーリングにおいて学生が学び得ることができた項目とそれに関連する社会人基礎力の能力要素を表にしたものである。表中の「◎」は活動によって養成の可能性が特に期待できると考えられる場合に，また「○」はその可能性があると考えられる場合にそれぞれ用いた。

表４から冬季スクーリングでの学生の活動は，社会人基礎力の能力向上に何らかの影響を与えているのではないかと考えている。今回の研究ではその能力を身に付けた，あるいは向上させる活動になったとは言い切ることはできない。しかし企画運営の活動をおこなうことによって 12 の能力要素を向上させる可能性はあるのではないかと推測される。

表４　冬季スクーリングのおける学生の学びと関連する社会人基礎力

社会人基礎力 ＼ 学生の学び	アクション			シンキング			チームワーク					
	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
対象の理解と重要性				◎					○			
情報の共有				○	○			○				
コミュニケーション		○							○			
臨機応変な対応	○		◎			○			◎	○		
自ら考え行動する	◎		◎				○			◎		
失敗から学ぶ				○		○						
チームワーク		○	○					○	○			
その他	○	○										

◎＝養成の可能性が特に期待できる項目　　○＝養成の可能性があると考えられる項目

６ 高校教員の評価

さて，高校教員は冬季スクーリングに参加した学生をどのように評価しているのであろうか。そこで，これまで担当教員として冬季スクーリングに携わった先生方５名にアンケートをおこない学生の評価をしてもらった。質問内容は表５の通りである。

表５　学生評価のためのアンケート質問内容

1）高校にとって、大学生がスクーリングの企画運営に携わることによるメリットがあると思いますか

2）高校にとって、大学生が企画するプログラムは生徒の有意義な活動をさせるないようになっていると思いますか

3）高校にとって、大学生の活動・同行は先生方の業務（生徒指導等）をサポートするのに役立っていると思いますか

4）高校生にとって、大学生との交流は学習指導上メリットがあると思いますか

5）高校生にとって、大学生との交流は進路指導上メリットがあると思いますか

6）高校として、大学生との打ち合わせやスクーリングでの大学生の活動・同行を負担に感じることがありますか

7）今後も、大学生がスクーリングに参加し高校生の活動をサポートしていくことが望ましいと思いますか

スクーリング終了直後に振り返りを高大教員と参加学生でおこなっているが，今後その成果を正確に把握し次年度に活かすために，高大それぞれで一度振り返りをおこない，その資料を持ち寄り教員間で十分な討議と評価を行うことが必要であると考えている。この取り組みを通して両者の課題やニーズを把握することができ，次年度に活かすことが可能になる。今後の課題にしたい。

表６はその結果である。ただ評価は担当教員として携わった教員個人の意見であり，職員会議等で振り返りをおこなった結果，高校教員のコンセンサスを得た評価ではない。

担当教員としての評価は，大学生が企画運営に携わることによって生徒の教育上効果があると解釈できる回答を得ることができた。コメントにあるように，高校側のメリットとしては，スクーリング中の教員の「生徒への個別指導の時間の確保」や生徒の「進路の動機付け」などではないかと考えられる。デメリットとしては学生が，高校が期待するような働きができるかどうかによって左右され，年度によって差があるということではないだろうか。コメントにある「プログラムに参加する学生による」はそれを表している。よって高校のニーズに応え，生徒の教育効果を高めるためには参加する学生の資質や基本的な能力を一定水準以上に高めておくことが必要である。その為にも，学生に求める資質や基本的な能力，そしてそのレベルについては，高大教員が十分に話し合い，コンセンサスを得ておくことが重要である。今後の課題の一つにしたい。

表６　高校教員の評価

質問番号	はい	どうちらともいえな	いいえ	コメント
1）	5	0	0	教員の負担が減り、個別対応が必要な生徒のために今まで以上に動けるようになった。 大学生と交流する機会は進路設計に役立てることができる。
2）	4	1	0	プログラムに参加する学生によるため、どちらともいえない。 歳が近いので生徒も積極的に関わろうとしている。
3）	4	1	0	とても助かっている。
4）	4	1	0	一生懸命やっている姿は良い印象を高校生に与えている。
5）	5	0	0	「大学は楽しい」というイメージを与えることに役立っている。
6）	0	3	2	ある程度打ち合わせに時間がかかるのは仕方がない。
7）	5	0	0	本校はいわゆる「進路多様校」なので、大学生と関わることによって進学意欲が高まる。

７ まとめ　～冬季スクーリングの成果と課題～

本研究では，高大連携プログラムとして実施している星槎国際高等学校「冬季スクーリング」での大学生の活動が，学生の社会人基礎力養成におよぼす効果を検証した。また今

後の連携におけるプログラム実施の課題を検討した。以下，高大連携プログラム「冬季スクーリング」の課題を以下に記し，まとめとする。

1）社会人基礎力養成におよぼす効果

①大学にとって，高大連携プログラムである冬季スクーリングは理論と実践という，学んだことを実践して応用力を養う可能性のある，またとない機会になっている。

②学生のレポートから，冬季スクーリングでの活動は社会人基礎力養成に効果が期待できる。

2）今後の連携におけるプログラム実施の課題

①毎年参加する学生が異なるため，その資質や能力によって企画運営内容や生徒におよぼす影響が変わってくる。よって，大学は参加する学生の資質や基本的な能力を一定水準以上に高めておくことが求められる。

②上記の資質や基本的な能力を含め，大学教員は高校の期待する教育効果やニーズを十分に把握理解した上で参加する学生の指導をおこなう必要がある。

③岩間らは高大連携において「単に生徒や学生の学習の場を提供し合うだけでなく，高校と大学の教員が協働的に授業や講義を展開し，生徒や学生それぞれの能力や目的に応じた学びを構築できるような研修組織を形成することが必要不可欠である」と述べている[2)]。このことから両校の生徒・学生への教育効果を高めるためには日常的な教育活動においても，高大教員間の協働的交流や意思疎通を図るための話し合いを継続しておこなっておくことが求められる。

参考・引用文献

1）井上えり子・山内拓司：「家庭科教員養成における実践的指導力の育成（1）
—高大連携による保育の授業研究—　京都教育大学紀要 No.112，2008，pp15~22

2）岩間英明，山内昌彦他：「体育・スポーツ分野における高大連携の在り方についての検討　岡谷東高校との高大連携協定に締結して（第1部松本大学地域総合研究員研究報告）　松本大学地域総合研究 10（part1），21-29，2009-06

3）小山悦司，赤木恒雄他：「高大連携事業の成果と課題—高校生のためのサマーカレッジ事例報告」教育学研究紀要 / 中国四国教育学会 [編]　CDROM 版 .W.　巻号：49（1）

4）勝村誠：「高大連携の現状と課題　特集　教育機関の連携による人材育成」 大学時報　Mar.2008

5）勝野頼彦：「高大連携～高校教育から見た課題と展望～　第1回　高大連携の現状」月刊高校教育 / 全国高等学校校長協会，高校教育研究会．巻号：36（5）2003-04　pp70-75

6）勝野頼彦：「高大連携～高校教育から見た課題と展望～　第3回　高大連携に対する孤高の意識（2）」月刊高校教育 / 全国高等学校校長協会，高校教育研究会．巻号：36（8）2003-06　pp90-98

7）勝野頼彦：「高大連携～高校教育から見た課題と展望～　第4回　高大連携の類型と体系化」月刊高校教育 / 全国高等学校校長協会，高校教育研究会．巻号：36（10）2003-07　pp68-74

8）勝野頼彦：「高大連携～高校教育から見た課題と展望～　第11回　高大連携の課題」月刊高校教育 / 全国高等学校校長協会，高校教育研究会．巻号：37（2）2004-02　pp66-73

9）勝野頼彦：「高大連携～高校教育から見た課題と展望～　最終回　今後の展望とこれからの高校教育」月刊高校教育 / 全国高等学校校長協会，高校教育研究会．巻号：37（4）2004-03　pp66-73

10）櫛田敏宏：「高等学校における連携する教育のあり方」愛知教育大学教育実践総合センター紀要　第8号，pp.55~62　2005年2月

11）竹田和夫：「高大連携の動向・実践・課題について」月刊高校教育 / 全国高等学校校長協会，高校教育研究会．巻号：43（12）2010-10　pp42-45

12）坪井順一：「高大連携による大学生の高校におけるインターンシップの事例と問題点」（Ⅰ論文・研究の部，インターンシップの新展開—光り輝く地域･企業と学校の創生を求めて—）年報（日本インターンシップ学会）　8，41-49，2005

13）松井範惇：「高大連携における AP について」IDE 現代の高等教育　2004年2月号

14）宮内洋，岡本拡子他：「短期大学部児童福祉学科における高大連携事業の取り組み—“一歩前のメンター”との協同体験からキャリアの可視化に向けて—　高崎健康福祉大学紀要　第11号　261-268頁 2012

16）文部科学省：「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」中央教育審議会答申　1999年11月

17）文部科学省：「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申　2008年12月

18）経済産業省：「社会人基礎力」http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm

19）群馬県立北毛青少年自然の家：「イニシアティブゲーム」
http://www.kihokumo.gsn.ed.jp/program/initiative.htm

20）日本レクリエーション協会：「チャレンジ・ザ・ゲーム」
http://www.recreation.or.jp/challenge_the_game/index.php